

クライストとフランス

横 谷 文 孝

「フランス、フランスの住民、首都、文学、因習と習慣、国民性（常にそのようなものがあると思えば）に対するクライストの関係は多層的であり多くのパラドックスに満ちている。」

(Michael Moering)

18～19 世紀にかけて、ゲーテやシラーと重なる時代に戯曲家、小説家として活躍したハインリヒ・フォン・クライスト (Heinrich von Kleist) (1777～1812) が、生涯でフランスに足を踏み入れた時期はおおよそ次の通りである。

- ・1801 年 (24 歳) : 7 月はじめから 11 月 17 日にかけて、姉ウルリーケと共にパリに滞在。
- ・1803 年 (26 歳) : 7 月末から 12 月頃にかけて、友人プフェルと共に旅に出る。10 月にパリ滞在。一時、フランス北海岸サン・トメールへ出向く。
- ・1807 年 (30 歳) : 1 月、ケーニヒスベルクからドレスデンへ向かう途中で、フランス軍にスパイ容疑で逮捕される。3 月にブザンソン近くのジュー要塞に監禁、4 月にはシャーロン・シュル・マルヌへ移送、7 月に釈放される。

1. パリのクライスト

軍籍を離れて 21 歳でフランクフルト・アン・デア・オーダー (Frankfurt an der Oder) 大学に入学し、学問の世界に身を投じたクライストは、やがてベルリンでの生活中に、いわゆる「カント危機」に見舞われた。カントの哲学を誤解して衝撃を受け、「この世では真理を見出し得ない」と信じて絶望状態に陥る。その不安を乗り越えようとして思いついたのが外国旅行であり、確たる目的もなくフランスのパリ、スイスを旅先に選んだ。1801 年 24 歳の時である。

この旅行は本人の言を借りれば「大がかりな散歩」¹⁾ (ヴィルヘルミーネ宛 1801 年 4 月 9 日) に過ぎなかったが、パリを訪れるのは初めてのことであり、旅に出る旨を伝えただけに姉ウルリーケに付き添われる羽目になった。ウルリーケはクライストのよき理解者ではあったが、姉が同伴する旅は重荷であった。男勝りの姉は、男装で旅をすることを嫌がらなかったようだ。「姉は男」であった。

家族や親族にまで何となく口にしたばかりに否でも応でもパリに行かざるを得なくなったが、彼がパリを何気なくにせよ思い浮かべた背景にルソーの影響があったことは否めない。婚約者ヴィルヘルミーネに教養を仕込もうとしてルソーの本を送ったこともあるほどだから、以前からフランスに対する関心は高かったといえる。ヴィルヘルミーネに宛てた彼の手紙からそれは明らかである。

「……君の手紙の前文に漂う、ルソーの精神は、私を一層喜ばせてくれるものであり、私は『ルソー全集』を贈るつもりだが、当分『エミール』をしっかり読んでもらいたい」²⁾。(ヴィルヘルミーネ宛て 1801 年 3 月 22 日)

「……今度の旅行を許してもらいたい—— そうだ、許してほしい。これは嘘偽りの表現ではない。と言うのは、私は今度の旅行の最初の動機が、確か

に軽率以外の何ものでもなかったと今自分で感じているからだ。……とにかくこの旅で有益なものを掴み、パリでもできる限り学びとって来るつもりだ。……とにかく続けて教養を身につけてもらいたい。できるだけルソーの思想を学びとること、この恋敵には私は絶対に怒らないから……」³⁾。(ヴィルヘルミーネ宛て 1801 年 4 月 14 日)

そして、まだカント危機を経験する前にもヴィルヘルミーネに宛てて次のような手紙を書いている。

「フランスのどこか、フランス南部あるいはヨーロッパで一番美しいフランス領スイスに滞在し、ドイツ語の教授をしたい。これによる利点は3つある。第1は、こんなに遠く離れていれば、私の真意を完全に理解しない親友たちの余計なお節介を受けず、自分の好きなような生活ができる。第2に、2, 3年間誰にも知られず、忘れられた存在となろう。最後に最も大事なことだが、フランス語を十分にマスターできるだろう。そうなれば、この国ではまだ全然知られていない新しい哲学を伝えたいと計画しているのでその役に立つことだろう。だがこの計画は誰にも知らせないでもらいたい」⁴⁾。(ヴィルヘルミーネ宛て 1800 年 11 月 13 日)

また、やがてモリエール、モンテーニュ、ミラボー、ラ・フォンテーヌなどの人物や作品にも目を向けているので、彼のフランスに対する関心には、並々ならぬものがあったと言える。フランス、特にパリを訪れたいという気持ちはすでに心のどこかで醸成されていたのかもしれない。

こうして彼は姉と共にベルリンを出発してパリに向かう。ところがパリに対する印象は望ましいものではなかった。シュトラースブルクからヴィルヘルミーネに宛てて次のように書いている。

「7月14日のパリ平和祭の前評判が立っているので、スイス経由は取り止めて直接パリへ行く。……どうにか平静な気持ちにはなって来たが、一方では私の心はこれから入って行くこの町に抵抗を感じている。私はフランス人に

つについてはその蛮行と悪徳しか知らないからである。愚かな連中は、パリへ行くのはフランスの風習勉強のためだと思うだろう。老詩人グライムまでが、私がフランスへ行くと云ったら悲しがった。そのわけを聞くと、私がフランス人になるだろうからとのこと。だが私はドイツ人として帰って来ると約束した⁵⁾。(ヴィルヘルミーネ宛て 1801 年 6 月 28 日)

クライストのフランスに対する負の感情がはやくも示されている。そしてその感情は後に体験するさまざまな事情によっていよいよ強められることになる。それはドイツ人、プロシャ人としての意識がますます高まることも意味していた。

7 月 18 日パリからカロリーネ・フォン・シュリーベンに宛てた手紙は、露骨な程にこの感情を剥き出しにしており、パリに対する嫌悪、見せかけの文化都市への反感、憎悪をあからさまに吐露している。

冒頭ではドレスデンで彼がシュリーベン姉妹と楽しく忘れがたい日々を過ごしたことを懐かしく思い出している。

「あなたはおそらくまだ一人のあわれな小さな人間を覚えているでしょうね？ その人は数ヶ月前、海ではうねりが少し高い荒れ気味の日に、人生の小船でドレスデンへ逃れ、この愛すべき地に碇を下ろしました。この地が彼にはとても快く感じられ、風がここではとても温かく吹いており、人々がとても親切でしたから」⁶⁾。(カロリーネ・フォン・シュリーベン宛て 1801 年 7 月 18 日)

文面から明らかなように、「誇りやかな、野放図な、恐ろしいパリ」と、真の故郷ともいえる「ドレスデンのやさしい、親しげな谷」とが対置されている⁷⁾。旅行中に彼は「とても多くの人々」に出会った。しかしクライストは書いている。

「……このパリの町は死んだも同然の町です。窓を開けると灰色の高いスレート屋根、不恰好な煙突、チュイルリー王宮の尖端がわずかに聳える色褪せた、無気力な、荒涼たる町以外には何も見えない。人間は群れをなしてい

るが、街角を曲がれば、そのまま忘れ去られる連中ばかり。……大都会の間は利口すぎて、率直になれず、気取りすぎて真実になれないからです。……行くも過ぎるも冷淡そのもの。……こんな風だから誰とも心の結びつきができないし、誰もよりつかない。……」⁸⁾ (カロリーネ・フォン・シュリーベン宛て 1801 年 7 月 18 日)

「21 歳のティークが、未知のパリをどのように見ていたか、どのように述べていたか」、それが、「24 歳の、はじめてパリへやって来るクライストに強い影響を与え、彼の見方を決めた」と、ヘルツォークは書いている⁹⁾。その見方はラベルの叫びに相応する。「ここでは何もかもが吐き気を催させる」¹⁰⁾。

学問に対する絶望を抱えたまま、目的もなく訪れたパリで気分転換することはできなかった。長年夢見たパリは期待はずれであった。8 月 15 日、許婚宛ての手紙では、彼女からの手紙を彼が受け取るためにパスポートを要求するパリ郵便局の人間の融通の効かなさの一例を挙げ、そして述べている。

「……長い間私の感情が私に囁いていたのが正しかったことを、今ここにきて私のすべての感覚が保証している。つまり、学問は我々をより良くも、より幸福にもしないということだ。学問は最高だというのに、最低の風紀紊乱を一目見た瞬間、私がどんな印象に打たれたか、到底君には言い尽くし得ない。一体運命はこの国民をどこへ連れて行くのか？……神だけがそれを知っている。この国民は他のヨーロッパのどの国民よりも没落への機が熟している。……フランス国民のほとんどすべての精神力を結集し、投入している自然科学の研究でさえ、この国をどこへ引っ張って行こうとするのか？……」¹¹⁾。(ヴィルヘルミーネ宛 1801 年 8 月 15 日)

フランスに対する反感、嫌悪は、これまで没頭してきた学問に対する不信にまでつながっている。あるいは反対に、「カント危機」の衝撃、学問に対する不信が昂じてフランス攻撃へ転じたともいえる。

許婚者ヴィルヘルミーネの妹ルイーゼは、パリに住むクライストを羨まし

がった。それに対してクライストは8月16日付けで返事を書いている。

「……パリの町は決してルイーゼが憧れるような町ではない。家並みはごちゃごちゃ、たまには美しい色のものもあるが、黄色ともグレーともつかぬみずばらしいものがある。道路は狭く曲がりくねって、垢だか汚物だかそれらの混じりあった臭気に満ち、背信、殺人、泥棒などをまるで問題にせぬ無秩序や、父と娘、息子と母の姦通、友人・親戚間の殺人すらが全く隣人でも敢えて耳を貸さぬほどの日常茶飯事となっている。道路に、あるいはセーヌ河に死人が見つかって誰も騒がない。服装の流行を追うこと、4月の天気の変動よりも早いと言える。窮屈すぎる上着を着るかと思うと、二人の人間がすっぱり入りそうなだぶだぶが流行り、今日寝巻きだと称しているものを、明日はダンスに着込んで行く。またその逆の服装ともなる。という具合で、誠に風紀紊乱、世俗人情の衰退ぶりは筆舌に尽し難い。人間の生命がただの品物扱いにされている」¹²⁾。(ルイーゼ・フォン・ツェンゲ宛て 1801年8月16日)

さまざまな例をあげてパリの不快さを示し、ルイーゼの気持ちを冷まそうとしているが、パリ批判はまたクライストの正直な気持ちの表われでもある。パリは「全くいかなるものも私を惹きつけない」とクライストは書いている¹³⁾ (ヴィルヘルミーネ 宛て 1801年10月27日)。ラベルが友人エドワード・バートンに宛てて書いているように。「パリを離れる日ほど私が憧れるものはない。私はここでは、興味を抱くものをまったく見い出せない」¹⁴⁾。

祖国での煩わしさを逃れて旅先で自由な生活を求めたにも拘らず、パリで幻滅を味わわされ、さらには姉と喧嘩別れし、画家の友人ローゼとも訣別する。12月半ばにはスイスに入ったが、相変わらずフランスに対する反感がしばしば顔を見せている。

2. 旅・放浪

クライストが大作『ローベルト・ギスカール』に取り組み、その一部を読んだ老大家ヴィーラントによって絶賛され激励されたことは伝説のように流布されたが、この大作のために彼は周到な準備を整え、古典劇を模範として舞台装置、その効果、筋の運び等について研究を重ね、情熱をこめて懸命に努力を払った。それにもかかわらず、筆は遅々として進まず、作品はついに実らなかった。その焦燥に駆られるかのように彼は、1803年の初頭からヴァイマル、ドレスデン、ライプツィヒ、ジェノバ、パリ、サン・トメール、ベルリンと転々と住所を変えた。

同年10月26日、サン・トメールから姉宛に次のように書いている。

「パリで私は出来上がった作品を読み返したが、破り焼き捨ててしまった。もうこれで終わりだ。天は地上最大の宝たる名誉を私に拒絶する。私は我儘な子供がするように、残ったすべてのものを天に投げ返してやる。私はあなたの愛情に値する人間であることを証明できない。といっても私にはあなたの愛情がなければ生きてゆけない。故に私は死の中へ飛び込んで行きます。しかし安心して下さい。崇高な姉さん、私は戦場で栄光の死を遂げる覚悟です。パリを去って、北フランス海岸を歩き回りました。フランス軍に入って働きます。間もなくフランス軍は対イギリス作戦に海を渡るでしょう。海上で我々を滅亡が待っています。永遠に素晴らしい墓には入れるかと思うと、私は歓声を上げているところです」¹⁵⁾。(ウルリーケ宛て1803年10月26日)

クライストを知る人がこの手紙を読めば間違いではないかと思うことであろう。軍人の家系に生まれ、自身も軍人生活を経験したほどの人間であるから、戦場で倒れる道を選択したとしても不思議はないが、フランス、殊にナポレオン嫌い(1805～6年頃になるとナポレオンを世界の悪玉と罵倒している)の彼が、フランス軍に参加して死を求めるとは、到底信じられないこと

である。この点について、翌 1804 年 6 月 24 日姉宛の手紙で、「……仮に国王が私を必要としなくとも、私は祖国に仕えるだけで、他国の王に仕える気持ちはない」と弁解はしているが、退役して間もないうえに、退職時の請書に「他国の武官、文官いずれを問わず就職せず、国王のため一市民として奉仕する義務は放棄するものではない」¹⁶⁾ (ウルリーケ宛て 1804 年 6 月 24 日) と約束したのであるから、フランス軍に参加したいという彼の意向は、不可解な謎である¹⁷⁾。

1803 年 10 月 31 日、プロシャの駐パリ公使ルッケジーニが Fr. ヴィルヘルム 3 世に宛てた報告によれば、「元士官 H.v. クライストは教養を高めるとの不明確な希望でプフェル氏とパリへ帰って来たが、突如行方不明となり、我々は彼の生命を案じた次第であります。同人は小官発行の旅券を所有せず、かつパリ警察当局の許可もなく、サン・トメールへ赴いた情報が只今到着。同地では特に戦時中につき、嫌疑を蒙り逮捕されるは当然のことであり、プロシャ臣民として受くべき保護も危ぶまれる次第であります」とのことである¹⁸⁾。『ローベルト・ギスカル』を完成できなかった衝撃は大きく、この頃のクライストの精神状態には極めて危ういものがあった。

3. 対フランス政策批判

1805 年 11 月リュール宛ての手紙でクライストは、時の政府の弱腰な対フランス政策を非難し、国家の将来を憂えている。これまで国王へ請願したことは何度かあるが、国策批判は初めてである。

「……冬の陣を張り、気長に要塞を包囲して戦いを始める方法なんて兎戯に類する。もし我々が、武器を手にしてただ脅迫の恰好で、フランス軍のオーストリアからの撤退を今後尚 1 ヶ月の間見守っていたら、フランス軍は我々を攻撃する。この冬中にも攻撃しかけてくると君は思わないか。膨大な勢力に対してこんなありきたりのお粗末な手段でどうして迎え撃つことが出来よ

う。フランス軍がフランケン侵入の折に、国王はなぜ直ちに議會を招集し、議會に対し熱弁をもって（苦悩だけで熱弁をふるえた筈だ）自らの立場を明らかにしなかったのか。……時代は新しい秩序の到来を求めているようだ。古い秩序が崩れ去るのだけは体験できても、新しいものを我々は何も知らずに過ぎるのだ。ヨーロッパのすべての開化した地域の中から、唯一の巨大な国家組織ができあがるだろう。そしてその王座は何れも新しいフランスに隷属する諸王家によって占められるだろう。全くの偶然によって、帝王の冠を授かったあの山師野郎は、オーストリアから絶対に出て行かぬと私は信ずる。それどころか近い内に新聞に〈ドイツ憲法大改正の噂〉という記事を読むだろう。そしてその次に〈ある偉大なるドイツの（南部の）王侯がこの改造の指導者となる由〉と出る。要するに、1年のうちにバイエルン選帝侯がドイツ国王になるということである。——この世界の悪霊の頭に、何故誰も一発の弾丸を撃ち込まないのだろうか。こんな亡命者がドイツに何の拘わり合いがあるのか、私は知りたいものだ……」¹⁹⁾。（リュウレ宛て 1805 年 11 月末）

クライストはこれまで国内の政治問題にはほとんど触れず、国王を批判したこともない。突然このような激しい非難を国王に向けるのは意外なことである。しかし当時のヨーロッパ状況を見ればクライストの行動も理解できる。

1789 年のフランス革命前後のヨーロッパ諸国の動静は特に混沌とし、諸国王の去就が相次いだ。ことに 1799 年ナポレオンが終身統領、次いで 1804 年皇帝として即位するに及んで、連合軍は三度も破られる。1805 年にはアウステルリッツでロシア・オーストリア軍を、翌年にはイェーナ及びアウエルシュテッツでプロシャ軍を殲滅して、ナポレオンの地位はほとんど磐石のものとなった。このように、国軍の度重なる敗北とナポレオンのヨーロッパ蹂躞は、ナポレオンだけでなくフランス一般に反感を抱くクライストをどれほど悲憤慷慨させたか想像に難くはない。フィヒテがあの世界的に有名な『ドイツ国民に告ぐ』を著したのもこの頃である。彼は、沈滞したドイツ国民の生活と軟弱な政府当局に警鐘を鳴らし、国家の危急を国民に訴え、その

奮起を促した。象牙の塔の枠を越えて国民感情に訴えざるを得なかった。時の為政者達の無為無策無能ぶりが窺える。リユーレに宛てて手紙を書いたクライストの精神と気概も、フィヒテに劣ってはいなかった²⁰⁾。

1805年5月頃クライストはケーニヒスベルクに着任。その後は、私生活に恵まれ、文芸活動にもかなり専念できた。

一方、時代は激動状況にあった。1805年12月アウステルリッツの戦い(いわゆる三帝会議)で、ナポレオンはロシア・オーストリア連合軍を破り、翌年1806年7月さらにライン連邦を組織、8月にはついに神聖ローマ帝国は滅亡した。そこでプロシャ・ロシア軍が第4次対フランス同盟戦争を起こしたが、またも10月14日イエーナ、アウエルシュテット及びハレにおいて徹底的に打撃を蒙った。11月ナポレオンはベルリンから対イギリス大陸封鎖令を発し、プロシャ軍は壊滅の状態となる。このナポレオンの勝利と蹂躪に対してクライストの憤怒は爆発した。10月24日、姉宛の手紙に彼は書いている。

「最愛の姉に。何たる恐ろしい時代の到来か!……姉さん達は逃げるのか? 噂によると皇帝はフランス軍にすべての町の掠奪を約束したとのこと。こんな乱暴極まる悪辣さを誰が信じられようか。すべては我々がすでに1年前予想した通りになってしまった。今日の新聞記事は、すべてあの頃書けた筈のものだ。……あの狂暴な奴が国を建てるなんて恐ろしいことだ。あの男に支配されたらどのような破滅に至るかをわかっているのは、ほんの一握りの人たちに過ぎない。我々はローマ人に征服された民族だ。彼はフランスを豊かにするため、ヨーロッパ掠奪を狙っているのだ。だが、果たして神意がどのようなお導きをなさるか、誰にもわからぬことだ」²¹⁾。(ウルリーケ宛て 1806年10月24日)

祖国を思うクライストの熱い思いと、ナポレオンに対する激しい敵愾心があからさまに示されている。

4. 逮捕と入牢

こういう状況下でクライストはまたもや旅に出た。

1807年1月彼はケーニヒスベルクをあとにして、友人プフェル他2名とドレスデンへ向かったが、ベルリンで思わぬ事態に巻き込まれ、ひどい経験を味わわされる。

1807年2月17日マールブルク発の姉宛ての手紙でクライストは次のように書いている。

「……ベルリンで私はクラルク將軍の命によって、ゴーヴァン及びエーレンベルクと一緒に、マインツ、シュトラースブルク、ブザンソンを経由して、フランスのジューに送られた。ここで平和回復の日まで留め置かれるとのこと。なぜこんな無茶な措置を受けるのか、姉さんにその理由も言えない。我々がケーニヒスベルクから来た、というだけの事実以外に何の厄介もなさそうに思われるのに、我々3人はスパイの嫌疑で逮捕された。なぜなら、ベルリン司令官クラルク將軍に旅券査証の署名をお願いしたところ、係官は特別に難癖をつけて嚴格極まる尋問を行い、旅券にある〈退役〉とは偽りだと決めつけ、そのまま拘留し、遂に3日目に、捕虜としてフランスへ護送するとの宣告を受けた。我々は無実を訴え、さらに、多くの高位にある人々を呼んでもらえば我々の証言の証を立てて頂ける筈だ、と申し立てたが全く無駄だった。こちらの言い分などまるで聞かないで逮捕し、早くも翌朝憲兵の手でウスターマルクに連れて行かれた。実際これ以上ひどいところは見つかるまいと思うほどの地下牢に、下賤な犯罪者同然に監禁された時、我々がどんなに驚き、不吉な前途を思いやったかは、想像ができるだろう。ところが運よく翌日、我々に付き添っていた憲兵の一人に、我々になされた仕打ちの不当性を納得させることができた。彼は命令は守らねばならぬが、駐屯地から駐屯地それぞれに我々をよろしく扱うよう頼んでくれると明言した。実際その時

からたいていの所では、部屋の前に番兵こそ立ったが、しかとした宿に泊まれた。それにしても、今度の処置ほど性急過ぎたやり方が他にあるだろうか？ フランス人の優れた判断力なんて、この場合まるでないのだ。おそらくあの時は、彼らにとっては、我々3人ほどどうでもよい人間は世界中どこにもいなかったのだろう。……」²²⁾。(ウルリーケ宛て 1807 年 2 月 17 日)

彼はジュー要塞からシャーロン・シュル・マルヌ要塞へ送られ、やがて釈放された。この事件によって彼のフランス人、ナポレオンへの憎悪、憤怒は完全に抹消しがたいものになった。ところがその一方、この幽閉により、彼は何の妨害も受けずに創作活動に専念することができた。皮肉にもこの経験には重要な意義もあったのである²³⁾。

5. ドレスデン時代 ― 出版業務 ―

1807 年 9 月からドレスデンにはいったクライストは、出版の仕事に携わりたいと思い、『ナポレオン法典』の出版やフランス政府の対独出版物の出版宣伝を考えたといわれる²⁴⁾。仏軍に逮捕され監禁までされた彼がこのようなことを考えることはありえない筈であるが、文筆業と出版業によって生活を立てるためのやむをえぬ思いつきだったのかもしれない。

1808 年はクライストにとって実り多い年であり、戯曲『ヘルマンの戦い』もこの年に完成した²⁵⁾。その一方で 1808 年ナポレオンとフランス軍のプロイセン占領に対する彼の憎悪に満ちたキャンペーンが始まる。既述の通り、1805 年のロシア・オーストリア軍、翌年のプロシヤ軍の崩壊によりフランス軍はますますその勢いを増した。一方ゲルマン民族には、全ドイツ統一の支配力を持つ者がいなかった。まさに古代のヘルマン時代を思わせるものがあった。フランス殊にナポレオンへの敵愾心を抱くクライストにとって、この時代状況は恰好の史的材料になった²⁶⁾。『ヘルマンの戦い』によってドイツ国民の士気を鼓舞したクライストは、ザクセンがフランスの同盟国となっ

たため、オーストリア公使ブオールがドレスデンを引き揚げ、ウィーンへ帰るのを機に、これに同行の予定を立てた。祖国のためにより一層活動できる領域を求めたのである。

1809年4月20日コリンに宛てて書いている。

「貴下の勇敢な『オーストリア兵士の歌』を読んだ私の喜びは筆舌に尽くしがたい。私も3編の愛国詩を書き同封したので、お気に召したら……公表したい……。できれば鉄の声で、ハールツ山上から全ドイツ人に歌って聞かせたい位だ……。ここにはフランス軍はいないが、今後はわからない。……さて前に述べた如く私の現在の唯一の念願は、『ヘルマンの戦い』の上演だけである。私はこの作品をドイツ国民に贈る」(コリン宛て1809年4月20日)と激しく闘志を燃やしている²⁷⁾。

この年1809年にクライストは知人の尽力を得て、週刊誌『ゲルマーニア』発行の許可を政府に申請したが、企画は失敗した。オーストリア軍は7月5、6日ヴァグラムにて敗北、14日ウィーン講和条約となったからである。救国の一念から発した同誌に予定した序文の一部とその内容の概略は次の通りである。

序文

「本誌はドイツ人の自由の第一声となる筈である。フランスの暴戾の下に呻吟した最近3年間、実直なるドイツ人の胸中にわだかまり、沈黙を守られていた一切の憂慮、すべての希望、すべての困窮、すべての幸福を吐露せしめんとする。かくの如き雑誌が出現する秋は、今の如き時代をおいて他にない。……オーストリア皇帝自ら勇敢な軍の先頭に立ち、人民の福祉繁栄のため、さらには、抑圧され、これまでいささか忘恩的であったドイツ救助のため戦いを起こされた。軍の総司令官に任ぜられた皇帝殿下は、この大業達成のため神の如き力を発揮された。……ドイツ人に賜ったこの崇高なる庇護に応えてドイツ人が今何をなすべきかをドイツ国民に告ぐるは今を逸しては

絶対に来ないであろう。善事に協力する悦びに動かされ、われらはこの事業を『ゲルマーニア』にて引き受けんとするものである。本誌は岩山の頂上に立ち、高らかな軍歌を谷にどよめかすであろう。おお汝祖国を、汝の神聖と栄光を歌うであろう……」²⁸⁾。

この『ゲルマーニア』において、「自由戦争の最も激しい憎悪の歌、クライストの『ゲルマニア讃歌』は、そこに現れる野蛮な歌詞〈ラインを彼らの死体で堰き止める……〉のモチーフをヴォルテールの „アンリアド“ から受け継いでいる」²⁹⁾。またこの週刊誌にクライストは種々の論文を掲載する予定であった。そのうち「問答式教科書」では、父親が子供に次のように教訓している。フランスによるドイツの抑圧に対し、ドイツ内に祖国愛が湧き上がったが、またもフランスに敗れる。そうしながら、人間最高の善が神、祖国、皇帝、自由、愛、忠誠、美、学問、芸術なることをドイツ国民は着々と教えられ、また自覚して行かねばならぬと³⁰⁾。祖国の全勢力を糾合して他民族の隷属から国民を解放し、自由を回復しようとしたヘルマンの故事に倣い、『ヘルマンの戦い』を発表したクライストは、さらに雑誌『ゲルマーニア』によって祖国の一層の安泰を念願した。しかし、ヴァグラムの大打でその計画は一瞬にして崩れ去り、1号も出せずに終わった。

1849年のダールマンの自伝には「……祖国の喜びにかけた希望は、やがて間もなく消え失せた。アスペルンの戦いは勇敢なオーストリア軍の悲しみとなって利用されずに終わった。……ヴァグラム戦にまた敗北を喫し、戦いは忠誠な国民のために行われず、王朝のためのものであったことが暴露した。つまり政府はナポレオンに対する憎悪よりも、国民の総決起を恐れた。オーストリア在郷軍、特にチロール人は勇敢だったのだが、結局不名誉極まる休戦後講和が結ばれ、今に至るまで3年にわたる苦難の時が続いている。」と記されている。祖国への絶望と『ゲルマーニア』の失敗に落胆したクライストは、プラハを後にして1809年11月にフランクフルト・アン・デア・オー

ダーの生家へ戻った³¹⁾。

6. ベルリン

1810年の1月に生家を出たクライストは、3月にベルリンに到着した。ドイツ国民詩人として、国民大衆の娯楽と啓蒙を目的とする『ベルリント刊新聞』の発行によって祖国に貢献すると同時に自らの生計を立てようとしたクライストは、非凡な才能を発揮して優れた論説、小品等を発表した。しかし、諸般の事情のために1811年3月30日、新聞は廃刊のやむなきに至り、クライストは借財を抱え込み、経済的に行き詰ってしまった。俗界の事情に疎い素人事業の終末である。

彼は、この新聞は思慮と英知によって一切の悪を糾弾し、腐敗墮落した者には徹底的に痛棒を加え、迷える者には警告を与え、愚かなる者を罵倒するものである、と宣告している。メーリングによれば、クライスト自身が『ベルリント刊新聞』の政治的ニュースの編集者としてふるまう流儀を理解する鍵は、『ゲルマーニア』でフランスのジャーナリズムに対して向けられた風刺的な『フランス新聞学教科書』にあるという³²⁾。

不倶戴天の仇敵ナポレオンにより蹂躪され、悲惨混乱のどん底に落とし入れられた哀れな祖国の姿に震撼を受けたクライストは、真の国民詩人として、予言者の自信をもち、表面上はゾロアスターの名を借りながら、『ベルリント刊新聞』の発行によって神クリストへの祈りを始めた。国民の宗教的・道徳的意識を覚醒、強化することにより、〈強奪者〉たるナポレオンを精神の剣によって克服する覚悟であった。しかし運命の女神は微笑んでくれなかった。『フェーブス』や『ゲルマーニア』と同じく、この挑戦的な出版活動もはかない一時の夢と消えた。廃刊の原因は政府筋の理不尽極まる厳格な検閲のせいだ、と彼は言っているが、彼自身の行き過ぎが禍をもたらしただけである³³⁾。

7. フランスの文学・思想とクライスト

すでに度々見てきたとおり、クライストはフランスやパリに対して激しい嫌悪感を示した。実際にパリがそれほど嫌いならば、すぐにでもパリから再び旅立ってもよさそうである。しかし彼はそうはせずに、大都市が提供する満足を味わい、すべてのことに参加し、見物に値するものをすべて眺め、彼の周りで起こるものを賢明に敏感に体験し、当時のフランスの「文学的因習に忠実に」、パリの「慣習の腐敗を非難している」³⁴⁾。

手紙の中でクライストは都市を〈売春婦バビロン〉と描写しているが、メーリングは、これはクライストがルソー以来支配的な考察方法に忠実に従ったものだと言っている³⁵⁾。パリについてのクライストのこのような描写にはルソーの影響がみられることも、メーリングはそのエッセー「フランス文学におけるパリ」の中で述べている。諸々の都市は「新エロイズ」と「エミール」の著者にとって人類の深淵であり、パリは「諸州の怪物」の姿で近づいて来る。「諸々の首都においては、人間の血液の値段が一番安い」³⁶⁾。

クライストに対するルソーの影響についてはすでにしばしば詳細に論じられたにもかかわらず、人々はクライストの芸術観と世界観に関する論文を一般にすぐに無視した。たとえばクライストの「世界の成り行きについての考察」は、ブルジョア社会（文明）の発生によって人間がその自然な源泉から徐々に離脱し疎遠になることを論じたルソーの思想を言い換えたもの、と解釈することができる³⁷⁾。クライストの「モラルなき寓話」へのルソーの影響を指摘することも意義深く思われる。この寓話はルソー抜きではいつまでも理解しがたい³⁸⁾。

クライストがルソーに傾倒していたことは、既述したとおりよく知られているし、クライストに対するルソーの影響がしばしば見い出されることもいま上述したとおりである。しかし、クライストはルソーだけでなく、モリエー

ル、ラシーヌなどにも関心を示しており、フランス文学や思想などに強い影響を受けていたことがわかる。フランス語もよくできた。たとえば次のとおりである。

- ・「……君のラシーヌ訳には素晴らしい箇所がある……」。(1806年8月31日リュレ宛の手紙)³⁹⁾
- ・1806年ケーニヒスベルクでモリエールの『アンフィトリオン』を翻訳した。文字通り訳したのではなく、いわゆる自由な翻案である⁴⁰⁾。
- ・『二羽の鳩』(Die beiden Tauben)、副題『ラフォンテーヌ (Lafontaine) に拠る寓話』。(原詩は Les deux pigeons) ……原詩の翻訳ではなく、堅苦しい形式に則らないクライストの自由な翻案ともいうべきもの。いわゆる「詩人」のタイプに属さない彼の少ない詩の中で、白眉と呼ぶことのできるものと思われる⁴¹⁾。

「クライストのパリからの長い手紙3通を観察すると……手紙類は彼の作家能力の試みのような性格をもつ。……都市とその住民へのきびしい批評は、特にルソー以来支配的な大都市批評の図式に合っており、パリを〈バビロンの娼婦〉の像に従って記している。部分的に文字通り一致する体験の「文化批評的」描写をもって、フランスの首都における観察、経験、体験によって、クライストは文学的伝統に加わっている。それはルソーから、……ティークを経て、バルザック、ビクトル・ユーゴ、ボードレールに達している（ミンダーのエッセイ「フランス文学におけるパリ」の中でクライストは見落されていない）」⁴²⁾。

クライストの「芸術観と世界観」についての著作集は、フランスの書物を「読むことで得た知識」だとみなすことが十分にできる。以前の「論文、幸福の安全な道を見い出すために」が、まだフランスを越えて広まっていた啓蒙主義時代のテーマと結びついている一方で、そのあとの論文と考察（「女性の啓蒙について」、「会話をしながら次第に考えをまとめあげることについて」等々）はルソー、モンテスキュー、ディドロ等著作集からの借用が

多い⁴³⁾。

作家の個性という点でクライストはフランス文学によって決定的に規定されている。才気あふれたパラドクスと落ちに対する彼の偏愛、心理的炯眼と多様な性格描写術は、『フランスモラリスト (モンテーニュやパスカルも数えられる)』を想起させる。彼の人生と作品に対するルソーの影響は誰かしらあるドイツ作家の影響よりも大きい。クライストは多読家であり、彼の読書の大部分をなすのはフランス作家達である——ルソーと並んで特にモンテスキュー、エルヴェシウス、ラ・フォンテーヌ、モンテーニュ、さらにまたモリエール、ヴォルテール、ディドロである。彼の短編のスタイル、「流儀 (Manier)」(ティーク)の特徴はともにフランスのシンタクスを模倣している点にある。19世紀と表現主義の意見によれば、「全ドイツ詩人の中の最もドイツ的な詩人」は彼の作品の至る所でフランス精神の痕跡を示している⁴⁴⁾。

クライストはフランス語そのものからも大きな影響を受けている。

ブレッカーは「……クライストにおいては感情、現実のみならず、言葉もまた常人のものとは幾分異なった意味を持つ」として次のように説明している。

「その故にこそクライストなる現象は矛盾に満ちたものであり、通常の尺度をもってしては測定できぬことが明瞭である。『公子ホンブルク』や『ギスカル』の作者は、言葉の点では決して偉大だとは言えないが、その欠陥は誠に公然たるものが多い。ドイツ語よりもフランス語がよく理解された環境の中で育ったこのプロシャ貴族は、生存中絶えずドイツ文法に対して、緊張の態度をとっていなければならなかった。彼の構文や句読法は、フランス語の影響を受けていることを物語っている。……」⁴⁵⁾。

また、メーリングによれば、「クライストはユグノー派の一人 (カーテル) によって教育・教授され、フランス語をすでに以前から母国語よりも正確に話した」⁴⁶⁾ ということであり、ヴァイセンフェストは、クライストに対する

フランス語の影響は「無意識の影響、詩人が意識しなかった影響と解釈され」なければならない、と述べている⁴⁷⁾。

クライストのドラマ用語と短編 (Erzählung) 用語がフランス語の影響を受けた可能性があることを、特にミンデプーとフリースが理解した。多数の例を使って、彼らはブラームの見解を証拠立てている。「彼の文体の固有性に至るまで」クライストへのフランス詩の影響を認めることができると⁴⁸⁾。

ナポレオンフランスに対する反抗を燃やす努力の中で、クライストが芸術や科学におけるフランスの業績に敬服していたことは疑いようがない。従ってクライストのフランス文化との接触は、幸運だと見ることができる。しかしながら、彼のフランスやフランス人との個人的な接触は、ほとんど災難にこと欠かなかった⁴⁹⁾。このように、「フランス、フランスの住民、首都、文学、因習と習慣、国民性（常にそのようなものがあるならば）に対するクライストの関係は多層的であり多くのパラドックスに満ちている」⁵⁰⁾。つまりクライストはフランスに対してアンビバレンツな反応を示した。当時のフランス、特にパリの表立った喧騒、頹廢的な状況や政治状況、特にナポレオンに対しては嫌悪、反発を覚えてはいても、文学や思想、学問等に対しては尊敬の念を抱き続けていたといえることができるだろう。

8. ゲーテとクライストのフランス観

ゲーテは1749年8月28日生れ、クライストは1777年10月18日生れだから、ゲーテの方がほぼ28歳年長である。ゲーテがイタリア旅行から帰った翌年、フランス革命が起こる。ゲーテは40歳だったが、まだ12歳のクライストには革命の意味はわからなかったことだろう。

しかし既述したとおり、クライストは後に1801年、24歳のときにパリを訪れている。そして7月14日のバスティーユの勝利を記念するパリ祭を見物した。「ところがそれは表面だけのお祭り騒ぎで、中身は何もない。オベ

リスク、アーチ、デコレーション、イルミネーション、花火、気球、小屋掛け芝居、手品師、綱渡り師等々盛り沢山のお祭りではあるが、本来の目的とは関係のないものばかり。あらゆる催し物のどれも、あの根本思想の数々を思い出させない。フランス人はルソーを年中金科玉条扱いしているが、もし彼の業績がこれだといったらルソーはきっと赤面するだろう（カロリーネ・フォン・シュリーベン宛て 1801 年 7 月 18 日）、とパリ祭への失望をぶちまけている。パリ祭を見たいために彼はわざわざ予定を早めて来たはずだったが、パリ祭に寄せた彼の希望は完全に裏切られた」⁸¹⁾。

自由と平和を象徴するはずのパリ祭にクライストがこれほど期待していたことは、彼がフランス革命を高く評価していた証でもある。

一方ゲーテは、フランス革命とそこから生じた事態を極めて深刻に受け取ったが、革命は否定した。社会の進歩は、政治を司る者が行う改革によって、急激にではなく、徐々に進められなければならないと考えた。それ故に彼は、ナポレオンが出現すると、革命とヨーロッパの動乱を鎮めてくれるものと期待をかけ、ナポレオンの支配によって平和と秩序が保たれると考えた⁸²⁾。

当時のドイツはほとんど 2 世紀におよぶ不運な騒乱状態のために荒廃していたので、ドイツ人は社交上の儀礼をフランス人に学び、高貴な表現法をローマ人から習得した。フランスではすでに 17 世紀以来、文学学士院（アカデミー・フランセーズ、1635 年創立）を中心機関として、フランス語の純化と体系化、フランス語をヨーロッパの標準語・公用語にしようとする運動が、国策的に進められていた。

一方、18 世紀のドイツでは、宮廷社会の「標準語」はドイツ語ではなく、フランス語が使われた。プロイセンのフリードリヒ II 世（大王）も、ドイツ語は「御者なみ」にしか使えなかったが、フランス語はフランスの一流の文化人にもひけをとらないほど上手に使えたという。しかしドイツでも 1617

年、1643年などに「ドイツ語純化運動」が起こった。「小国分立」のせいで全ドイツ的な運動にはならなかったが、18世紀にはこの運動が徐々に実を結びはじめ、ドイツ語も文章語としてかなり改善され、その地位も次第に上がって来ていた。ラテン語よりもドイツ語の本の方が多くなった。

しかし、ドイツ語の地位が向上しても、ドイツの文化の中でフランスを模範として仰ぎ見る姿勢は変わらなかった。文学の世界でも、17世紀フランスの古典主義文学、コルネユやラシーヌの悲劇、モリエールの喜劇、そしてその作劇作法が模範とされた⁵³⁾。書簡体小説はリチャードソンに始まったといわれ、ルソーの『新エロイズ』もその形をとったが、ドイツ的感性のうねりを頂点にまで高めたのはゲーテの『若きヴェルテルの悩み』であり、この時代における「ドイツ」意識の覚醒も、このような感性と無関係ではない⁵⁴⁾。

ゲーテは、1770年4月から翌71年8月まで、20歳から21歳にかけて、シュトラースブルク（ストラスブール）に遊学した。古くから神聖ローマ帝国に属したドイツ人の土地エルザス（アルザス）と帝国都市シュトラースブルクは、1648年のウェストファリア条約とフランスの「太陽王」ルイ14世のその後の侵略で神聖ローマ帝国から奪われ、政治的にはすでにフランスの領土になっていた。従って、エルザスとシュトラースブルクでは、ドイツ文化の土壌の上にフランス文化が表層的に広がりはじめていたところであったから、ドイツの教養人がフランス語とフランス文化を身近に学ぶためには、都合のよい地域であった。

ところがゲーテはこの土地で自分の希望と相異なる経験を重ね、フランスやフランスの習俗に背を向けてしまった⁵⁵⁾。それは、シュトラースブルク時代のゲーテが、「高貴」で「上品」なフランス文学に我慢のならない「老成」を感じ取り、「努力する」若者の「生の享楽」と「自由」をそれに対置したからである。ほぼ1世紀前の1687年、トマジウスは「ゲルマン的習俗」に

対して、「精神の美しさ」「良き趣味」「優雅さ」がフランスの社会生活の長所であるとした。しかし、ゲーテやシュトラースブルクの「怒れる若者達」はこれにもはや我慢できなかった。

「このようにして私たちはフランスの国境にありながら、すべてのフランス的な特性を一挙に放棄してしまった」のであった。「自伝」(第12章)

フランス語とフランス文化から離反し、ドイツ語とドイツ文化のもつ独自の価値を発見したゲーテに大きな影響をおよぼしたのは、よく知られているように、ゲーテよりも5歳年上のヨーハン・ゴットフリート・ヘルダーであった。各民族がもつ模倣不可能な独自性を強調するヘルダーの思想は、フランス文化の模倣からの脱皮を志していた若いゲーテにとって力強い刺激となった。

このようなゲーテの「ドイツ」意識は、その表現の対象をシュトラースブルクのゴシックの大聖堂に見出した。しかしこれはゲーテだけのことでなく、当時ゴシックという言葉は、専ら「よき趣味」の反対語として用いられており、ゲーテも当時の常識に従って、野蛮な趣味を示す言葉としてこれを理解していた⁵⁶⁾。

しかしゲーテの「ドイツ」意識は総じて文化的なものであり、政治的な意味は含まれていない。文化的にはいまだドイツに属するエルザスとシュトラースブルクが、政治的にはフランスの一部となっていることに、ゲーテは違和感を持っていない。また彼は、古い芸術観や演劇における「三一一致の法則」をフランス的と呼んで攻撃したが、彼の敵はフランスやフランス人そのものではない。たとえば、フランス人ではあっても、古い文化規範と戦うルソーやディドロは同盟者であった。「老成」した「フランス的」文化規範に対する「ドイツ的」戦いにおいては、政治的国境は意味を持たない。

ゲーテが「自伝」の中でシュトラースブルク時代のことを執筆したのは、1812年冬から13年春にかけてのことであり、ナポレオンがモスクワ遠征に失敗し、この機をとらえてプロイセンの「愛国者」たちがシュタインを中心

に結集したときであった。そしてまたプロイセンとロシアの同盟を軸にして「解放戦争」が起り、祖国の解放のためにドイツの若者が義勇軍に加わった時期であった。

ドイツに初めて政治的ナショナリズムの熱気が湧き起こったその時に、ゲーテはこの熱気に完全に背を向けていた。対ナポレオン戦争の義勇軍に身を投ずる若者に向かって、「あの男〔ナポレオン〕は君たちには偉大すぎる」と言ったと伝えられる。しかしその一方で、彼は『詩と真実』の完成に向け、フランス文化に対する自分のドイツの戦いを書き綴っていた。

このように、政治と文化とはゲーテにおいて、一貫して別の次元の事柄であったといえる⁵⁷⁾。意味合いは大きく異なるが、クライストとは別の意味でゲーテもやはりフランスに対してアンビバレンツな態度を示している。

ナポレオン支配の圧力の下で神聖ローマ帝国は崩壊する。1806年8月に神聖ローマ帝国が消滅した時、ゲーテがまるで関心を示さなかったことはよく知られている⁵⁸⁾。ゲーテが57歳、クライストが29歳のときである。ゲーテはまた人も知るナポレオン崇拝者だった。ナポレオンもゲーテのことは知っており、『若きヴェルテルの悩み』を7回も読み返したといわれている。また、ゲーテは1808年10月に、エルフルトのフランス占領軍の大本営に呼び出されてナポレオンに謁見したこともある。

一方クライストはひたすらにナポレオンを不倶戴天の敵とみなした。自国ドイツを脅かすナポレオンを許すことはできなかった。同じ文学者でありながらゲーテとの差異は際立っている。

反ナポレオン感情と結びついた愛国熱が、これまでにない勢いでドイツに広まった時、ゲーテはこの愛国熱から離れたところにいる。

「私はフランス人を憎んではいなかった。……地上で最も文化が進んだ国の一つであり、私自身の教養の大部分がそのお陰をこうむっている国民を、どうして憎めたらう！」と言うのである⁵⁹⁾。

しかし注意すべき点は——これは彼が晩年に至って、はっきりと「世界文学」を志向したことと関係するのだが——彼が国民文化の閉鎖性を否定し、それが世界に向かって開かれてあるべきことを強調していることである。

ゲーテの世界市民性は、これも「感性の文学」と関連しているが、彼が翻訳をもって「我が国の文学の重要な一部」と捉えたことにも現れている。彼はドイツ人に対し、「世界に働きかけるために、自分の中に閉じこもるのではなく、世界を自分の中に取り込む」ように要求する（フォン・ウヴァロウ宛、1817年3月28日）。このような「ドイツ」なら、神聖ローマ帝国の「状態」やナポレオン体制とさえ両立するし、メッテルニヒ体制とも十分に両立する。

反面、民族的自尊心と対抗心、民族的憎悪が衝突するようなナショナリズムは、この文化的ドイツを脅かす。従ってゲーテがメッテルニヒ体制に順応するのは当然であろう。しかしそれは同時に、新しい時代、また若い世代の願望との乖離の過程でもあった⁶⁰⁾。

クライストもルソーやモリエールなどのフランス文学者や思想家から大きな影響を受け、特にルソーに対しては敬意の念を示している。この点ではゲーテと一致する。確かにゲーテは学生としてシュトラースブルクで過ごした頃は、フランスの多くに反感を示し、フランス語とフランス文化から離反したが、それはいわば若気の至りのような一過性のものであり、根本的にはフランス文化に対する敬意は不変であったといえる。

一方、政治的な問題に対しては、クライストの方がゲーテよりもはるかに激しい態度を見せている。その根本はクライストの強い愛国主義にあるといえる。軍隊生活を嫌って軍籍を離れたクライストではあったが、軍人の家系に生まれたがゆえに、幼少の頃からプロシャ精神を叩き込まれていた。それゆえに、ナポレオンの侵攻に激しく反応した。特に晩年近くには、文学者としてよりはジャーナリストとして政治批判や愛国運動も行ない、フランスに対しても強い反感を示した。

既述したとおり、ゲーテにとって政治と文化とは別の次元の事柄であり、フランスやナポレオンに対して彼が敵意をみせることはなかったが、クライストの方はフランスの文学や思想に敬意を抱きつつ、政治的にはフランスやナポレオンに対する抵抗活動に情熱を注いだ。ゲーテを敬い、ゲーテから認めてもらいたいという熱い思いをもちながら、資質の違いから、結局クライストはゲーテに嫌悪され、受け入れられることはなかった。両者が互いに相容れない存在だったことは、以上の両者のフランス観の違いからもみてとることができそうである。

[A] [テキスト]

Heinrich von Kleist: Sämtliche Werke und Briefe Zweiter Band Carl Hanser Verlag München 1965

[B] [参考文献]

1. Michael Moering: Witz und Ironie in der Prosa Heinrich von Kleists Wilhelm Fink Verlag München 1972 AIII Exkurs: Kleist und Frankreich
2. W. Herzog: Paris in Kleists Briefen und in Tiecks „William Lovell“ in: Euphorion XV 1808
3. Robert. Minder: Paris in der französischen Literatur (1760~1960)
4. Günter Blöcker: Heinrich von Kleist oder Das absolute Ich. 1960
5. O. Brahm: Heinrich von Kleist
6. W. Tieck, Werke Bd. 6,
7. R. Weißenfels: Über französische und antike Elemente im Stil Heinrich von Kleists
8. 福迫佑治著 「クライスト——その生涯と作品」 1978 三修社
9. 坂井栄八郎 「ゲーテとその時代」 1996 朝日選書
10. 中村 啓訳 「全訳 クライストの手紙」 1979 東洋出版
11. 坂井栄八郎 「ドイツ歴史の旅」 増補 1992 朝日選書
12. 手塚富雄・神品芳夫 増補「ドイツ文学案内」 1993 岩波文庫
13. 菊池栄一他 「ドイツ文学史」 1964 東京大学出版会

※ 拙稿の執筆にあたっては、福迫佑治氏と坂井栄八郎氏の著書を大いに活用させていただいた。

《注》

- 1) [A] [テキスト] S. 641 / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 102
- 2) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 96 / [A] [テキスト] S. 632
- 3) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 105 f. / [A] [テキスト] S. 647
- 4) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 77 / [A] [テキスト] S. 589 f.
- 5) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 114 / [A] [テキスト] S. 658 f.
- 6) [A] [テキスト] S. 659 / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 115
- 7) [B] 1. Michael Moering: S. 146
- 8) [A] [テキスト] S. 661 f. / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 115
- 9) [B] 1. Michael Moering: S. 150 / [B] 2. W. Herzog: S. 714
- 10) [B] 1. Michael Moering: S. 150 / [B] 6. W. Tieck: S. 51
- 11) [A] [テキスト] S. 681 f. / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 131 f.
- 12) [A] [テキスト] S. 685. ff. / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 134 f.
- 13) [A] [テキスト] S. 698 / [B] 1. Michael Moering: S. 150
- 14) [B] 1. Michael Moering: S. 150 / [B] 6. W. Tieck: Werke Bd. 6. S. 49
- 15) [A] [テキスト] S. 737 / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 222 f.
- 16) [A] [テキスト] S. 737 ff.
- 17) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 223
- 18) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 224
- 19) [A] [テキスト] S. 760 f. / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 242~244
- 20) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 245
- 21) [A] [テキスト] S. 770 f. / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 259~262
- 22) [A] [テキスト] S. 776 f. / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 265~267
- 23) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 342~344
- 24) [B] 1. Michael Moering: S. 137
- 25) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 401
- 26) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 416
- 27) [A] [テキスト] S. 823 f. / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 418
- 28) [A] [テキスト] S. 375 f. / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 419 f.
- 29) [B] 1. Michael Moering: S. 137
- 30) [A] [テキスト] S. 350 ff. / [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 419~423
- 31) [B] 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 424 ff.
- 32) [B] 1. Michael Moering: S. 138

- 33) 〔B〕 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 523 f.
- 34) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 146
- 35) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 145
- 36) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 149／〔B〕 3. Robert Minder: S. 291
- 37) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 153
- 38) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 156
- 39) 〔A〕 〔テキスト〕 S. 769 f.／〔B〕 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 259
- 40) 〔B〕 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 249
- 41) 〔B〕 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 281
- 42) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 145 f.
- 43) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 153
- 44) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 138 f.
- 45) 〔B〕 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 207／〔B〕 4. Günter Blöcker: S. 57 ff.
- 46) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 137
- 47) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 160
- 48) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 159
- 49) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 166
- 50) 〔B〕 1. Michael Moering: S. 137
- 51) 〔A〕 〔テキスト〕 S. 664～665／〔B〕 8. 「クライスト — その生涯と作品」 S. 120
- 52) 〔B〕 9. 「ゲーテとその時代」 S. 7
- 53) 〔B〕 9. 「ゲーテとその時代」 S. 40～44
- 54) 〔B〕 9. 「ゲーテとその時代」 S. 58
- 55) 〔B〕 9. 「ゲーテとその時代」 S. 59 f.
- 56) 〔B〕 9. 「ゲーテとその時代」 S. 60～64
- 57) 〔B〕 9. 「ゲーテとその時代」 S. 66 ff.
- 58) 〔B〕 9. 「ゲーテとその時代」 S. 221
- 59) 〔B〕 9. 「ゲーテとその時代」 S. 242
- 60) 〔B〕 9. 「ゲーテとその時代」 S. 242～252